

---

# セクシーバイオレンス

Dear

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セクシーバイオレンス

### 【Nコード】

N9638A

### 【作者名】

Dear

### 【あらすじ】

馬鹿みたいな死に方をした男『神崎零』を待っていたのは懐かしくて優しかった人物！しかしまさかの閻魔様だった！？パロディーを含む作品です！軽くエロいこの作品は、エロいのが嫌いな方は、そんなにエロくないですがご遠慮ください ではどうぞ！！

## （前書き）

この作品は連載するか悩んでいます・・・

その点などをしこ意見して下さいるとうれしいです

毎日が楽しくて

毎日がつまらない

そんな矛盾した生活を俺は送っていた

俺は神崎 零かんざきれいという高校二年の普通の男だ

意識が確かで、視界が正常なら俺は死んでしまったのだろう・・・

何故なら・・・

「下でブツ倒れてるのはどう見ても俺だもんな・・・」

不幸というかな？

自転車に乗り、レンタルしたDVDを返した後だったよな？

同じ中学出身の友達である山井 紗香やまいさやかから電話があり、再びレンタルショップに行くハメになったんだ

別に暇だから良かったはずなのに・・・

偶然、落ちていたエロ本に気を捕らえられなければ・・・

「嫌な死に方だなあ・・・まさか、そのまま飛び出して来た車に引かれるなんて・・・」

「理解してるところで悪いんですけど?」

後ろを振り向くと、白い超ミニスカートの白い顔したスレンダーな少女が浮かんでいる

何コイツ?

幽霊?

とりあえず、下にいる比較的、傷の無い自分を見つめて見る

「どうしよう?体に飛び込む!とかしても無理そうだし・・・」

「聞いてます?おゝ聞いてる!?」

とりあえず、この少女はシカトするしかないようだ

「おゝい!お兄さんってば!・・・お兄さん安くしとくよ」

ピクッ!

心は正直だね？

一瞬、心が動きそうになるが俺は騙されん！（笑）

もしかしたら死神かもしれないし！

すると、少女はこう言った・・・

「生き返りたく無いんだ？ならいいや！」

その後、土下座で30分程説得（空中に浮かびつつ土下座は変か？）をして俺は少女と話してみた

「私はイチゴって言うの！よろしく」

「分かりやすい名前だなあ？んで、どいうう用件で？」

「報告にあつた通りの方で良かったですう！実は今から良い所に私とイツて貰います」

良い所？

ミニスカの少女と良い所に？  
って事は・・・

「そんな事を言われても！まだ初対面ですし．．．」

「何を照れているんですかあゝ？早くイキましょう」

俺の妄想は膨らむ中で手を引っ張るイチゴという少女は凄いスピードで空間を移動する

従って、俺は凄まじい勢いで引っ張られる訳で．．．

10分後

俺は腕が見た事ないくらいに伸びて（幽体だから崩れやすいらしい．．．）一つの建物の中にイチゴと一緒にいた．．．

「神崎さん！もっと早く歩いて下さい！この先で御待ちになられるんですから！」

「待つてゐるって誰が？イチゴちゃん？何か俺を騙してな．．．」

ズゴッ！

話の途中で後ろから誰かに頭を蹴られる

「イチゴ！こんな貧弱な男が神崎なのか？そうなのか！？」

「そうよ？でも可愛いお兄さんよ？そのうちメロンにも分かるわよ？」

どうやら頭を蹴った女はメロンて言うらしい・・・

イチゴとは対照的に黒を基調としたやっぱりミニスカートの健康的に焼けた肌の少女

「おい？全然良い所じゃないぞ？」

「大丈夫ですう！すぐに良くなります」

「説明してないの？閻魔様の事？」

ちよつと待て？

今、言った言葉は『閻魔様』で間違いないだろうか？

間違いないとすれば、とんでもなくデカい化物に会わなきゃならぬのでは？

漫画の世界ならオシャブリをした小さな奴だけど・・・

「では、行きましょうか？神崎さん」



左腕をイチゴが掴む

「命令だし．．．仕方ないわね？来なさい神崎とやら！」  
右腕をメロンが掴む

引きずられながら状況整理をする．．．

壁に掛かっている肖像画とか見ても、デカい化物の様な『閻魔様』  
が描かれている

死んだなこりや．．．

あつ！もう死んでるんだった！

紗香に告げてない（万年片思い）のに死んでしまい、ミニスカの少女（よく考えると年は大して変わらなそうだ）に惑わされてココに来たら閻魔様にご対面！ パッパラパー！って全然シャレにならねえええ！

両腕を引っ張られながらも考え事していると、半端じゃなくデカイ扉の前に到着！

門番らしい二人のお兄さん（かなりのイケメン）にイチゴが笑って話しかけている

すると、どうだろう！

二人のお兄さん（よく見たら角が生えてる）は微笑みながら俺にさ  
さやいた．．．

「地獄に落ちろ！このフック野郎！」

ん？今なんて．．．

「グズグズしてんじゃねえよ！早くしねえと×××を×××にし  
てピーだぞ？このフッキンチビ」

放送禁止ワードどころじゃねええええ！

作者のノリです！すみません反省してます．．．

「ん？今、誰かがノリって言った様な．．．」

気にする時間もなく、口の悪いイケメン門番二人が扉を開くとイチ  
ゴとメロンに放り投げられる．．．

バコッ！

赤い絨毯の上に見事に腹を打ち、ご到着完了です

「グハッ！あの二人、力が強すぎ……」

「あの〜？」

「しかしデカイ部屋だなあ？」

「お〜い？こっちに来てよ〜！」

「何か呼ばれてるから行くか……」

大きな部屋にある書類だらけの机

その向こう側にやたら美人でスタイルがよくて、この土地に似合わない笑顔の女の子が座っている

閻魔様ってこんなに美人な秘書を付けれるんだなあ……

かなり露出度の高い服を着ているが、顔とのギャップで常人なら鼻血で憤死しそうである程に美しい女性

「あの？閻魔様に会わされに來た神崎零ですけど？閻魔様はご不在ですか？」

テンパって軽く丁寧に質問してしまう

「ココにいますよ？神崎くん？」

「えっ？どこに見当たりませんか？」

「相変わらず面白い方ですね？目の前にいるでしょ？」

俺は今までの人生で一番というくらい思考が停止した

閻魔「デカい化物

目の前の彼女の発言×この部屋にいる自分以外の人物」閻魔

目の前の超セクシーな女性 先程の方程式による結果 目の前の彼女が閻魔様確定！

高校に入った時より今なら頭がまわりそうな程に脳が俺に答えを導き出す……

「閻魔様ってデカい化物みたいな方では……」

「それは祖父ですね！父親は私より小さいですし？」

「何故にそんなに露出度が高い服を？」

閻魔様が着ている服は上半身が胸の中心が大きく開いた赤く体にフィットする興奮度最高潮の代物である

下半身は普通の黒いエナメル状の代物だが、よく見れば側面が下着が見えないギリギリの所まで切れ込みが入っていて、その部分を薄い糸の様な金属でいくつもクロス状に合わせているセクシー過ぎる一品

長く黒い髪にとんでもなく大きな胸、ウエストは細くてヒップは程よく出ている

この俺、神崎零が求める最高のセクシーさであるのだああ！

「神崎くんの趣味でしょ？あれ以来、私は頑張ってここまで来たんだから！」

「さっきから気になっているんですが、初対面ですよね？」

次の瞬間に長い沈黙が部屋に流れる

そして……

「ひ、ひどいわ！私を忘れるなんて……うわああああん！」

閻魔様が泣いちゃったよ……

アレ？この泣き顔に何か見覚えが……

何て考えてると

「貴様！閻魔様を泣かせるなんて！やはり×××を×××にして  
ピーしてやる！」

イケメン門番二人がシンクロ率を最高潮で放送禁止ワードをいいな  
がら部屋に乱入！

俺、消滅される？

いや、まだだ！逃げちゃ駄目だ！逃げちゃ駄目だ！逃げちゃ駄目だ  
！逃げちゃ・・・駄目なのかな？やっぱり？

二度目の死を覚悟した時に、門番二人がの動きが止まる

さらに顔が青冷めていく・・・

「私の客人に手を出すなんて拷問されたいのかしら？」

先程まで泣いていた閻魔様が冷たく鋭い声を発する・・・

俺は怖くて後ろを振り向く事が出来ないが、禍々しいオーラを感じ  
る事が出来る

あまりの殺気にイケメンな門番二人は膝がガクガクになり、続いて腰を抜かした

結局、門番二人は気絶して寝転んでしまったのでイチゴとメロンが連れて行った……

未だに涙目の閻魔様が俺に鼻声で話しかける

「本当に私の事を覚えてないの？神崎くん……昔は零って呼べって何回も怒った癖に……」

「……あのくもしかして、まさかですけど……」

記憶が確かなら一人だけそんな事を言った女の子を知っている

「間違ってたらゴメンね？柳姉ちゃん？」

名前を呼ばれて天使の様な笑顔の閻魔様

小さい頃の記憶

初めて柳姉ちゃんと出会ったのは、五歳の時だった……

夕方に家出した愛犬の蓮れんを探していた時だった．．．

ワンッ！

蓮の声が聞こえたのは家から少し離れた公園だった．．．

子どもの足では遠い公園に中学生くらいのお姉さんと仲良く一緒にいたんだよね

「蓮！？探したぞ！こんなところにいた！」

「クウーン！（あっ！零！）」

お姉さんから離れて俺に飛び付き、顔を舐めまくる蓮

「うわっ！くすぐりたいよ！なんでこんなところに居たんだ？」

「ゴメンね？私が引き止めたの！」

「お姉さんはだれ？犬泥棒？」

「違うわよ？私は柳．．．閻魔えんまやなぎ 柳よ！」

閻魔の意味を知らない俺にとって、彼女はただの柳姉ちゃんとなった．．．



毎日、夕方にこの公園にくる柳姉ちゃん

すぐに仲良くなつてしまい、俺は毎日が楽しみだった……

「神崎くんの夢は何なのかな？」

「神崎くんって呼ぶな！零って呼んで！夢はね……」

しばらくの沈黙の後に俺はとんでもない事を言つたんだ……

「セクシーな女の人と結婚する事！」

「ええ！？凄い事を言つわねえ？じゃあ……零が大人になつたら私と結婚する？（笑）」

話は戻つて閻魔の部屋

「零が何て言つたか覚えてる？」

「覚えてるよ……我ながらマセガキだったな……」

俺が言つた答え

それは．．．

『柳姉ちゃんは綺麗だけど、おっぱいが小さいから駄目!』

それに対して柳姉ちゃんの答え

『ち、小さくないもん!普通だもん!．．．いいもん!見てなさい!もっと大きくなったら結婚してもらうから!』

とんでもない約束をした記憶だ．．．

小さい頃だから鮮明には覚えてないが、大体こんな感じだったはず．．．

「なんだ!覚えてるじゃない?約束通りに大きくなったわよ」

確かにデカイ

普通は胸が大きい人はタレるのだが、まるでその傾向がない上に形が良い何て．．．

閻魔様はやっぱり化物だな．．．

「そつえば柳姉ちゃんって、年をあまりとってないような気がするんですが?」

「そう?魔力のおかげね これでも170歳になったわ」

単純に10倍年上ってどうゆう事だ作者！

俺は普通に頭が悪いんだよ？単純で悪かったな単細胞高校生が！

「お楽しみのとこ悪いけど．．．零、いつ結婚する？」

「結婚！？俺、死んでいてそれどころじゃ．．．」

大事な話をしていたその時．．．

「ウィーッス！柳いるか？時間通りきたぞ？」

登場したのは渋めのおっさん

「いや、あんた誰？柳姉ちゃん？あのおっさん誰？」

「あの人？幼馴染みの鈴吉さん（りんきち）だよ？ちなみに職業は神様だよ」

うわぁ．．．何か知らないけど、神様が来たよ．．．

「一応、俺と零ちゃんは初対面じゃないけどな？ちなみにお前さんが事故った時によそ見たあの本は俺のだ！」

初対面じゃない上にあの本まで神様のかよ．．．

いい大人がエロ本持つてるなんて凄えな．．．

ってか、この世界にもエロ本あるのか？

「いやいや？あの本は地上で買ったんだ！何なら貸そうか？」

神様、心を読まないで下さい．．．

「鈴吉さんは最近になって神様襲名した期待の新人なの」

「四代目神様です！やっと継げたぜ！」

いや、興味ないッス．．．心を読んでいたら右手で頭をかいてみて下さい．．．

右手で頭をかきながら神様は話し始めた

「遊んでる場合じゃなかったわ！すぐに戻していいの？」

「いいわよ？すぐに地上へパイルダーオンお願いね」

「あの？俺は元祖超合金ロボじゃ・・・」

「この間の少年のお礼だ！マッハで地上に送ってやるぜ！！」

何か柳姉ちゃんに借りがあるらしいが、それはどうでもいいから普通に地上に戻して下さい・・・

神様の借りが知りたい方は『続・眠れぬ夜に』をご覧ください

作者よ？しっかり宣伝するな！

いやー！うっかりと宣伝してしまったよ？

どっちかというと、『ちゃっかり』だけだな？

「戯れている所で悪いんだが、準備が出来たぞ？」

作者のにひれ伏している間に地上へ帰る準備が出来たらしい

「コラッ！勝手に俺の心の変化をな！」

「零？時間がないからこっちに来て」

「ああ！ゴメン！柳姉ちゃ・・・」

柳姉ちゃんは近付いた俺にキスをした

「無事に帰れるおまじないよ．．．」

すぐに後ろを向いた柳姉ちゃんの声は心なしか鼻声だった．．．

「今度は私から会いに行くから．．．それまで忘れないでね？」

「．．．わかった！絶対忘れない！」

「んじゃ！良い場面で悪いが、入院中の病院へパイルダーオン！そして、スクランダークロオオオス！！」

「だから！俺は元祖超合金ロボじゃ．．．ウギヤアアア！」

気がつくところには病院だった．．．

片思いの紗香が泣きながら俺の体を揺すっている所に魂復活！

一週間後の学校

「紗香？何でそんなに顔が近いの？」

「また死にかけられたら困るからかな？」

病院で目覚めてやっと昨日に退院した俺は目覚めて以来、やたらべつたりの紗香に困惑気味だ……

「あのね？零くんと言わなきゃいけない事があるの……」

朝から告白タイム！？

ドキドキしていたその時である

ガラガラ

「みんな席に着け！今日は昨日に転校して行った山田×5に代わって、転校生が5名来て居る！しかもだ！美女が3名に美男子が2名だから期待しやがれ！」

待て！うちのクラスに山田は5名もいない！っていうか、元々うちのクラスに山田なんて人物はいねえ！！

嫌な予感がしてきた

そして教室のドアが開いて……

「閻魔 柳です」

「美味 イチゴです」

「熟下 メロン！」

「門前 右京じゃあ！」

「門前 左京じゃあ！」

「「よろしく！みなさん！そして、ただいま！神崎零！」」

クラスメイトの視線が一気に集中……

いきなり俺に飛び付いたセクシーに制服を着こなした柳姉ちゃんを見て、男子生徒が一斉に背中からバットを出した時に死を予感したのは言うまでもない……

ちなみに紗香を除く女子生徒はイケメン門番二人に目をハートにさせて、イチゴとメロンは先生に賄賂を渡していた……

柳姉ちゃん会いに来るの早過ぎじゃあああ！

セツトで来るなんて聞いてねえええ！

その後、バットで襲い来る男子生徒を避けていたら、紗香がどこから出したか分からない黄金に輝くハンマーで殴りやがってぶっ飛びました……



まだ生きていたのに、それを見た柳姉ちゃんが俺を守ろうとしてセクシー過ぎる胸で頭を抱き締めたので気絶しました……

「零ちゃん？こっちに来るの早いね？」

「あの～？神様助けてくれます？」

気付けば神様の前に来ていた俺に神様が答える……

「……作者が駄目だつてよ？つて事でパイルダーオン！」

「そげなあああ！」

こうして、破天荒な日常を送っていく神崎零であった……

「作者がまとめるなあああ！！そこは俺にやらせる！」

却下したところでさようなら！

（後書き）

いかがでした？

連載するかは読者次第ですけど、その他に苦情等などがあれば作者にご連絡下さい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9638a/>

---

セクシーバイオレンス

2010年10月20日19時55分発行